

全国市街地の変遷

昭和の記憶から次代へ

周囲1・2キロの島

軍艦島は正式名称を端島(端島炭鉱)といい、長崎港の沖合約18キロに浮かぶ周囲1・2キロ、約6・5分の小さい島である。外洋から見ると菱

炭鉱業の一大拠点であり、長崎県でも軍艦島をはじめ、高島、池島、松島等の炭鉱で大規模な操業が行われていた。軍艦島では江戸時代後期より小規模な採掘活動が行われてきたが、1890年に三菱社(現三菱マテリアル)が買収以降、経営規模が徐々に拡大され、長崎県でも有数の炭鉱に成長していく。最盛

期の坑道は地下約1000メートルまで達し、島の規模を遥かに超える範囲で縦横無尽に海底が掘り進められていた。

戦後、中国人、朝鮮人の引き揚げや徴兵・原爆による日本人労働者の減少より一時的に軍艦島の人口及び石炭生産量は急減するが、戦後復興政策や50年の朝鮮戦争による特需の影響もあって徐々に操業が盛り返され、再び人口と生産量が増加し始めた。

この時期に結成された組合が経営側である三菱に対して賃金上昇や島での生活環境の改善を求めたため、労働者の

後半から、国の基幹エネルギーが石炭から石油へと変化すると共に、炭鉱の地位の重要性が失われ、さらに採掘に多額の費用がかかる国産石炭も外国産石炭に価格競争の面で勝てず、国内炭鉱事業の採算性が合わなくなる流れの中で各地の炭鉱は徐々に閉山されていった。軍艦島も例外では

なく、三菱による生産調整や人員配置転換により徐々に人口が減少し、74年1月に閉山。同年4月には労働者の家族を含め全て島から退去し、無人島となった。

15年度には28万6936人まで増加しており、現在では長崎市を代表する観光施設の一つとなっている。特に土日や長崎市中心部での大きなイベントの開催時には参加希望者が増えるため、上陸ツアーの予約が数週間前から取れないほどの盛況を呈している。

時代の流れを実感

ツアーにおいて施設内部への立ち入りはできないものの、グーグルマップのストリートビューで立ち入り可能なエリアの確認ができるようになっている。

また、多くの書籍や写真集で現在と操業当時の内部の状況が紹介されており、特に昭和の全盛期の写真と同じ場所を撮影した現在の写真を見比べると、言いようのない寂寥感や無常観を感じるが、時代の流れが人や都市に与える影響を実感できる貴重な資料であると言える。

長崎市 軍艦島・廃墟の島から人気観光施設に



長崎港の沖合約18キロの海上に浮かぶ軍艦島の遠景(上)と近景



エネルギー政策の転換で閉山、無人島に

世界遺産登録で一躍脚光

待遇が大きく改善されたほか、住宅、店舗、風呂、水道設備など島民の生活環境を支えるインフラが次々と建設され、その状況を見た島外の労働者の流入が加速し、人口が最盛期を迎えた60年には島内居住者が5000人を超え、当時の東京都区部の9倍もの人口密度を誇った。

ところが、60年代後半から、国の基幹エネルギーが石炭から石油へと変化すると共に、炭鉱の地位の重要性が失われ、さらに採掘に多額の費用がかかる国産石炭も外国産石炭に価格競争の面で勝てず、国内炭鉱事業の採算性が合わなくなる流れの中で各地の炭鉱は徐々に閉山されていった。軍艦島も例外では

現在軍艦島の施設はかなり老朽化が進んでいるため、崩壊しているものも多く、辛うじて建っているものも今後ほとんどが崩壊する運命にあると言われるが、可能な限りその圧倒的な存在感と勇姿を長く留めてほしいものである。(日本不動産研究所長崎支所、田平和史)